

Title	史學研究會報告
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1951
Jtitle	史学 Vol.25, No.1 (1951. 7) ,p.127- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510700-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

妥當なものであるか否かと言うことである。氏は繰返し構造論的把握なるものを強調されるが、社會萬般の構造そのものが浮動してやまない此の様な時代の考察に然う言う方法が果して何處まで可能であらうか。何と言つても史的に「構造」と言うことは一聯の現象を俟つて始めて言えることなのであらう。現象そのものが、ややもすれば斷片的で而もまちまちになりがちな世界に何うして「構造云々」から立論し得るのであらうか。何かその論理には予盾がある様な氣がしてならないのである。且つ又その様な方法は一應うなづける叙述を生むとしても、事實を知れば知るほど然うした叙述のもつ意味は影が薄くなる様な氣もしないではない。この書が一部の讀者に不満を興えたとすれば、正にその根據の一つは此處にあるものと推察される。要するにこの書の目的は「史論」であつて「特殊研究」の發表ではないのであるから我々は寧ろ軽い氣持でその主張に耳を傾けなければならぬ。我々は斯うした史論に、もう少し寛大な態度で臨むことを學ぶべきである。何も事實の詮索だけが史家の仕事ではあるまい。

筆者は著者の増田氏が年來積んで來られたドイツ中世經濟史研究の成果に對しては常に深甚な敬意を拂えるものであり、殊に氏の健康上の苦闘を想つてそのたくましい營爲に驚異の眼をみはるに吝かなものでないことを附記して筆を擱く。(近山金次)

(一九五一年四月十九日)

書評

史學研究會報告

第三九五回例會 卒業生送別會

昭和二十六年一月三十一日午後一時 於六番教室

國史

平安朝に於ける個人主義の自覺と厭世思想

内海 深君

豊臣秀吉のキリシタン政策

今井 多似君

東洋史

日唐交通路の變遷について

林 和男君

西洋史

十七世紀末から十八世紀初頭に亘るイギリス重商主義

飯田 義弘君

政策の特質

加賀美 久夫君

ルツターの贖宥提題について

高橋 巖君

獨逸ロマン主義國家觀の一考察

三浦 洋君

F. Rörig リュベックと市參事會制度の起源

大屋美知子君

英國の農村貧民と「改正救貧法」の性格

宮崎 六郎君

ピューリタン革命初期に於ける言論統制

米田 治君

マイネツケの國民思想について

平野 和男君

英國と米國(ブリトン教授)

篠塚 幸子君

「日本文明の由來」に於けるバックアの影響